



タイトル 名言で楽しむ「世界の名画」

著者 こだわり^{ちしきあいこうかい}知識愛好会

出版社 PHP 文庫

発売日 2016年12月14日

ページ数 203頁

表紙の写真は、ティツィアーノの『フローラ』である。約60年もの間、ヴェネツィア派で最高の画家と絶賛された人物がティツィアーノ・ヴェッチェリオである。19世紀のロマン主義絵画の領袖であったドラクロアは、1854年10月4日の日記で彼を評して次のように絶賛している。「ティツィアーノ！まったく、彼こそだんだん年を取ってきた人々に楽しみを与えるべく制作したように思える男だ。」と。

「わたしは自分の命を作品に捧げ、そのあまりわたしの理性は半ば崩壊した。」(ゴッホ)、「ぼくの人生は実に奇妙であった……ほとんど小説といってもよいくらいに。」(ムンク)、「わたしは鳥が歌うように描きたい」(モネ)、「わたしは捜さない。見つけるのだ。」(ピカソ)、「ただ一つ、自然よりほかに師はない。」(ルソー)、……………。

作品について、美について、人生について——「美の巨匠」たちが遺した“名言”に注目してみると、名画の真実が見えてくる。

本書では、ゴッホ、ダ・ヴィンチ、ムンク、ルノワール、ピカソ、フェルメール、クリムト、ゴーギャン、レンブラントといった人気西洋画家の名言を取り上げ、彼らが抱えた悩みや哲学、作品に隠された謎などに迫りながら、名画を読み解いていく。

名画の知られざる魅力を、巨匠の“名言”から発見……………。画家の発想を知れば、展覧会が10倍楽しめるという、新しい名画の楽しみ方を教えてくれる一冊である。

さっそく目次を見てみよう。

はじめに

第1章 巨匠だって、悩んでいる

フィンセント・ファン・ゴッホ

「わたしは自分の命を作品に捧げ、そのあまり私の理性は半ば崩壊した。」

レオナルド・ダ・ヴィンチ

「作品を制作するときはあらゆる人の批評を拒んではならない。」

エドヴァルト・ムンク

「ぼくの人生は実に奇妙であった……ほとんど小説といってもよいくらいに。」

ミケランジェロ・ブオナローティ

「もはや絵も彫刻もこの心を癒してはくれぬ。」

ピエール＝オギュスト・ルノワール

「世の中にはもう不愉快なものが溢れているではないか。わざわざ芸術の中に不愉快なものを描く必要もなからう。」

エル・グレコ

「芸術の達人といえども困難はあり、要はいかにも楽々と描いたように見せるかであろう。」

エゴン・シーレ

「現代的な芸術など存在しない。あるのはただ一つ、永遠に続く芸術のみである。」

パブロ・ピカソ

「わたしは捜さない。見つけるのだ。」

第2章 名画を生んだ哲学

ヨハネス・フェルメール

「それは遠近法で構成された、もっとも驚愕すべき、最も風変わりな点をもっていた。」

アンリ・マティス

「わたしは秋の風景を表現するために、この季節にぴったりの色は何かと考えたりはしません。わたしはその風景がわたしのなかに生み出す感覚のみから発想を得ます。」

エドガー・ドガ

「若者よ、記憶から、あるいは自然にもとづいて線を引きなさい。たくさん線を。」

アメデオ・モディリアーニ

「何か仕事をするためには、わたしはわたしに向かい合っている生きた人間を見ることが出来なければならない。」

ジョン・エヴァレット・ミレイ

「率直に言って、わたしは一度もカンヴァスに意図的に無意味な筆を置いたことがない。」

ウジェーヌ・ドラクロア

「単なる古代の模倣には何の意味もない。」

アンリ・ルソー

「ただ一つ、自然よりほかに師はない。」

ジャン＝フランソワ・ミレー

「率直に言って、わたしは一度もカンヴァスに意図的に無意味な筆を置いたことがない。」

ジェームス・マクニール・ホイッスラー

「ある芸術が社会で人気があるとなかろうと、本質とは無関係である。芸術は孤高な存在である。」

ジャクソン・ポロック

「失敗作に終わるのは、絵との接点を失った時だけだ。」

第3章 名画の謎を解く言葉

グスタフ・クリムト

「わたしは自画像を描いたことがない。わたしは絵の主題としての自分自身に興味がないのだ。わたしは他の人びと、とりわけ女性を好むし、さらにもっと他の存在を好む。」

マルク・シャガール

「わたしは夢を見ない。」

フランシスコ・デ・ゴヤ

「スペインの女たちは惑わせるのが上手。でもゴヤの方が一枚上手。」

ポール・ゴーギャン

「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか。」

ポール・セザンヌ

「絵画には、二つのものが必要だ。つまり、眼と頭脳である。この両者は、おたがいに助け合わなければならない。」

ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ

「(すぐれた画家とは) 自然の事物をうまく描き、うまく模倣することのできる画家だ。」

パウル・クレー

「芸術の本質は、見えるものをそのまま再現するのではなく、見るようにすることである。」

ルーカス・クラーナハ (父)

「君はその迅速さをもって描き、その迅速さで (中略) あらゆる画家を凌駕している。」

ピーテル・ブリューゲル(父)

「彼の手になる作品で、観者がさめた真顔で眺めることのできる作品は少ない。たとえどんな気難しい人や落ち着き払った人であろうとも、少なくとも、にやにやあるいはくすくすと忍び笑いをせざるを得ない。」

第4章 明日への希望

アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック

「人間は醜い。されど人生は美しい。」

ディエゴ・ベラスケス

「わたしは優雅な画風で誰かの追随者になるよりも、粗野な画風で先頭に立ちたいと思った。」

レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン

「わたしが探し求めているのは名誉ではない。自由である。」

クロード・モネ

「わたしは鳥が歌うように描きたい。」

エドゥアール・マネ

「わたしはこの生活を愛する。社交界を、ざわめきを、光を、パーティーを、そして色を。」

ティツィアーノ・ヴェチェッリオ

「ティツィアーノ！まったく、彼こそだんだん年をとってきた人々に楽しみを与えるべく制作したように思える男だ。」

ヤン・ファン・エイク

「これが吾の為し得る最前なり。」

アンディ・ウォーホル

「忙しくしていること。人生で一番素晴らしいのはそれだ。」

西洋絵画年表

「ゴッホ」はオランダ生まれの画家で、画商の店員を経て牧師修行を行うが、1880年に画家になることを決心する。以降、画商の実弟・テオの援助のもと、各都市を転々としながら作品を描いた。印象派や日本の浮世絵などの影響を受け、「ひまわり」「アルルの跳ね橋」など数多くの名作を遺している。

自らの片耳を切り落とした事件以降、ゴッホの精神が激しい浮き沈みを繰り返していた頃、1890年1月、弟テオと妻ヨハンナとの間に男の子が生まれる。その男の子はゴッホにちなんでフィンセントと名付けられた。ゴッホにとって初めての甥の誕生に、彼はどれだけ心を癒されたことだろう。ゴッホの最後の手紙の一節には、こう書かれてあった。

「わたしは自分の命を作品に捧げ、そのあまり私の理性は半ば崩壊した。」なおゴッホの業績を世に伝えたのはヨハンナである。夫・テオが兄の死の翌年に亡くなってからも、彼女は義兄の正当な評価を望み、尽力したという。



ゴッホは、現在でこそ極めて高い評価を得ているが、不遇の生涯を送っており、生前に売れた絵はたった1枚で、それも「赤い葡萄畑」だけであった。それでも弟テオの援助でなんとか生活していた。ゴッホは画家としての活動が約10年間と短い。絶対数としては油彩900点、素描1100点であった。

1887年に描かれた「タンギーおじさん」をよく見ると、背景に日本の浮世絵がたくさん並んでいる。日本人の目から見ると、浮世絵がどうしてそんなに評判だったのかと不思議に思うがフランスの印象派時代の人たちの目から見ると、浮世絵のあり方というものが本当にショッキングなことだったことが良く判る（「絵の教室」 安野光雅 中公新書 ほか）。

「ムンク」が人生を振り返って述べた言葉に「僕の人生は実に奇妙であった……ほとんど小説といってもよいくらいに」というのがある。画家には、生活のために筆を執る人と、そうでない人がいる。つまり、「カンヴァスに絵を描くことでしか慰めや救いを得られない人」のことである。ムンクも、後者の部類に属する画家の一人だ。軍医の子として

生まれたムンクは、幼いころに結核で母と姉を失い、自身も13歳で咯血したことで、彼の意識には病と死への不安が刷り込まれていった。

彼は自身の絵について、こう述べている。「僕は見ているものを描くのではなく見たものを描く。所詮カメラなど筆やパレットに張り合える代物ではない。第一、地獄にしる、天国にしる、カメラで写してこられる場所ではないのだから。」



評者は、30代の初めに仕事で冬季ノルウェーのオスロを訪れたことがある。4か月の滞在期間中、空いた時間を利用して、オスロ市内にあるムンク美術館を訪れた。はっきり覚えていないが、入場料は無料であった記憶がある。順路に沿って見ていくと最初のうちは通常の写実的な絵画が多かったが、歩を進めるうちに、だんだん筆の運びが怪しい雰囲気になっていくのに気付いた。さらに進むと美術の教科書でも馴染みの「叫び」があった。しかも、色彩の異なった3点ほどの「叫び」である。そこで立ち止まってしまった。……。

「フェルメール」はオランダ生まれの画家で、その生涯の詳細はあまり知られておらず、遺された絵画も三十数点のみで、謎多き人物である。1669年までにはフェルメールの世間での評価は確立されており、デルフトを訪れたベルクハウトの日記には次のように記されている。「名高き画家フェルメールを訪れた。フェルメールは彼の芸術の例をいくつか私に見せてくれた。それは遠近法で構成された、もっとも驚愕すべき、最も風変わりな点を持っていた。」

静謐な雰囲気を持つ室内画は評価が高く、代表作に「デルフトの眺望」「真珠の耳飾りの少女」「牛乳を注ぐ女」「天文学者」などがある。



フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」が巻いているターバンの青。このつややかな青は、フェルメールがこの絵を描いた時から350年を経た今も、殆んど色褪^{いろあ}せていない。なぜかという、細かく砕いた宝石で描かれているからである。フェルメールはこの青色を描き出すために高価なラピスラズリを用いた。ラピスラズリは、ヨーロッパの近くではアフガニスタンでしか産出せず、それが海路で運ばれたため、「海を越えて運ばれる青」という意味で「ウルトラマリン」と呼ばれた。

ウルトラマリンブルーは通常の青い絵の具の百倍の値段がついたとされる。通常の画家は限られた部分にしか使わない貴重な絵の具だったが、フェルメールはこのウルトラマリンブルーをふんだんに使ったといわれている。フェルメールの青については、生物学者の福岡伸一氏の「福岡ハカセの本棚」や「ルリボシカミキリの青」などにさり気なく登場する。

「ドラクロワ」と言えば、1830年のフランス7月革命を題材とした「民衆を率いる自由の女神」がすぐ頭に浮かぶ。日本の歴史教科書などで挿絵として使われることが多く、日本国内における作品自体の知名度は高い。フランス国旗を掲げて群衆を先導する女性が、あたかもフランスの国民的英雄ジャンヌ・ダルクを彷彿とさせ、同胞の遺体を乗り越えて

自由への闘争を繰り広げる民衆の壮絶な争い的一幕が力強く表現されている。

フランス生まれの画家で、美術学校の師のアカデミックな考え方に共感を覚え、ロマン主義（知性よりも情緒を、形式よりも内容を重んじた芸術上の思潮）に鋭く感応して画家人生を歩む。「民衆を導く自由の女神」「アルジェの女たち」などの傑作が多い。

ドラクロワの名がフランス絵画界に広く知られるようになったのは、1822年、毎年開かれるサロン（官展）に、最初の大作「ダンテの小舟」が展示されたのだが、ドラマティックで感情に満ち溢れたその作風が、当時の主流であった新古典主義の静謐で感情を排した絵とは明らかに異なっていたからである。

以上のように、本書は、世界の錚々たる画家の「名言」を取り上げ、作品とともに紹介している。世界の名画を、彼らが語った言葉に耳を傾けつつ眺めてみると、作品に描かれた筆あとや人物像の表情が今まで感じていたものとは異なって見えるようになるから不思議である。

しかし、ゴッホの「タンギーおじさん」の背景に出てくる浮世絵は何だろう。ヨーロッパで、時代が新しい絵を模索していたとき、西欧にはなかった浮世絵の色・形・線そして風俗は彼らにとって強烈な刺激だったに違いない。西洋の絵と浮世絵を比較すると、浮世絵には「線」がある。縁取りなどの「線」がある。ところが、自分達の（フランスの）絵には線がなかった。これは、彼らの目から見るととても新鮮だったに違いない。

ゴッホは、「日本へ行きたい。出来ることなら日本へ行って、あの人たちが描くような絵を描きたい。彼らの描く絵は、我々とは何か基本的に違うところがあるんだ」と憧れる。

多分、浮世絵は彼らの創造性が認識したものであり、我々は彼らの目を透して浮世絵を再認識したのかも知れない。

2017.3.20